

- ⑧ 1号墳床面から、腐蝕した人骨および副葬品と見られる須恵器（長頸壺）1点が出土した。他の横穴からの出土品はなかった。
- ⑨ 愛宕山横穴群は、構造形態、出土品などから見て、7世紀後半から8世紀頃にかけて、仙台地方にすんだ豪族の墳墓と見られる。

6. 仙台市内の横穴群とその地域的位置づけについて

現在仙台市内では、8ヶ所で横穴古墳が検出されている(表、第8図)。

これらは、地形的には東流する3つの河川（七北田川、広瀬川、名取川）によって開析された、3つの東西にのびる丘陵の東端部斜面もしくは崖面に形成されている。これら8ヶ所の横穴も地域ブロック毎のまとまりという観点から見ると、大きく4つのブロックに分けることができる。

まず、それぞれのブロック毎に北からその分布状況を見てみたい。

Aブロックは、七北田川北岸、七北田丘陵から南方向に分岐した3つの枝尾根の斜面に多数の横穴群が群在する。それぞれ別の尾根状に位置する為、従来は別個の呼称をされてきたが、地域的に見れば互いに密接な関連を有する横穴群である。いずれも未調査の為、実態は不確定であるが、総数100基は下らない横穴群が群在すると思われる。なお、このブロックの存在する丘陵の反対側（すなわち、北東斜面）利府町菅谷地区にも一大横穴群ブロックが存在する。

Bブロックは、台原小田原丘陵東端部南側の枝尾根の斜面に一ヶ所だけ形成された。これが、仙台市指定（昭和43年）の善応寺横穴群である。この横穴は古くから識者の間で注目され、特に戦後は幾度かの発掘調査がなされ、多種多様の横穴が群在することが判明し、総数も100基を下らないと推定されている。

C、Dブロックは、西多賀、長町丘陵東端部の南北両斜面に多々群在しているが、いずれも、未調査で実態不明の横穴群である。

Cブロックは、西多賀長町丘陵北側斜面、広瀬川南岸の枝尾根愛宕山を中心として群在する。この付近は第二次大戦前後より宅地化が急速に進展した地域で、宅地化の際は、人骨や須恵器、直刀などが出土したとかの噂がかなりあった地域であり、総数も100基を越えると推定されるが、人為の形跡著しく全般に保存良好なものは数少ない。

Dブロックは、戦後、発見された横穴群で、位置的には名取川北岸、西多賀長町丘陵南斜面にある。向かいあった二つの枝尾根の斜面に、未調査であるが総数100基前後に達するものと思われる。

ところで、このような市内横穴群のブロック毎の分布状況を見ていくと、その周辺に時代的地域的に関連のある遺跡がいくつかとりまいていることが指摘される。ここでは特に、横穴と

いうものの形成基盤として、弥生時代以後形成されたと考えられる自然村落的定住集落跡および文化的階梯の上で前後の段階を占めていると考えられる高塚古墳、官衙遺跡などを主たる対称として列挙してみた。

A ブロックでは、従来、これと関連するような遺跡はほとんど見出されなかったが、最近、七北田川南岸、自然堤防上に自然村落的集落跡が存在することが、まだ報告書は出ていないが宮城県教委などの調査で確認されている。

B ブロックでは、断片的ながらいくつかの集落跡、古墳との関連が想定できる。

C ブロックは、市街中心部に近接し、宅地化の進行の為、周辺部分に関連する遺跡の存在を見出すことは困難だが、やや距離的に離れるが、準関連遺跡として南小泉地区の古墳、集落跡との結びつきを想定したい。

D ブロックは、横穴の発見が新しかったのとは対照的に古くから古墳や集落跡の存在が知られ、また最近まで典型的な田園地帯であった為、関連する遺跡の存在を想定することが容易である。

以上のような想定のもとに横穴の分布状況を見なおしてみると、それらは強く地域のあり方に結びついていることが指摘できると思われる。逆にいえば、横穴のあり方から、地域のあり方を想定することが可能であるともいえる。仙台市内の横穴群はまだ未調査のものが多く、従ってその実態もはっきりしない部分が多いが、しかし、従来まで知られてきた各横穴の形態、構造から判断して時期的にはほとんど同時代的のものと見てよいと思われる。してみると各ブロックの横穴は、各々の同時代的な地域のあり方を代表している面もあると見てよいだろう。たとえばA ブロックは七北田川南岸自然堤防上の自然村落を基盤とし、B ブロックは小田原丘陵東南方、七北田川支流梅田川周辺の自然村落、C ブロックは広瀬川東北岸の自然堤防上に形成された自然村落、D ブロックは名取川北岸、西多賀耕土を中心とした自然村落を、各々基盤としていてと考えられる。愛宕山横穴群は、仙台市中心部を基盤としていたと見られる点で、位置的にも実質的にもその中の重要な位置を占めていたと考えられるのである。